

〈研究資料〉

教え子の語る梅村すみ子：田口（山下）博子氏インタビュー

富田幸祐* 木村華織**

Interview with Hiroko Taguchi about Sumiko Umemura

Kosuke TOMITA *, Kaori KIMURA **

Abstract

This article is a transcript of an interview with Hiroko Taguchi (Yamashita) about Sumiko Umemura. At the 1972 Olympic Games in Munich, Hiroko Taguchi represented Japan in the women's long jump. Sumiko Umemura was the partner of Seimei Umemura, the founder of Chukyo University. Sumiko Umemura competed in the Women's World Games and the 1932 Los Angeles Olympics as an athlete and was a pioneer in Japanese women's athletics before the prewar. After retiring from athletics, she devoted herself to coaching younger athletes at Chukyo University Women's Athletic Club. Taguchi was coached by Sumiko Umemura when she was a student at Chukyo University. In this interview, Taguchi shares some of the valuable episodes she experienced with Sumiko Umemura during her four years at Chukyo University.

略歴

田口（山下）博子

福岡県添田町出身。専門は走幅跳。

福岡県立三潴高校1年生の時に日本陸上競技選手権大会で優勝。以後8連覇を果たす。

1970年3月に三潴高校を卒業。1970年4月中京大学体育学部に進学。陸上競技部に所属し、在学中の1971年9月に自身の持つ日本記録を更新する(6m27cm)。1972年ミュンヘン・オリンピックに出場。キャリア最高記録は1972年6月の6m41cm。

はじめに

本稿は中京大学陸上競技部に所属し、1972年ミュンヘン・オリンピックに出場した田口

(山下)博子氏に対し、梅村すみ子に関するインタビューを行ったものである。田口氏にインタビューを実施した経緯について説明したい。

中京大学スポーツミュージアムでは第8回企画展として梅村すみ子を取り上げることとなった。梅村すみ子は、中京大学創設者である梅村清明のパートナーであり、国際女子競技大会や1932年ロサンゼルス・オリンピックに陸上競技の日本代表選手として出場、戦前の日本女子陸上競技界を牽引し、戦後は梅村学園の運営や中京大学陸上競技部などで後進の育成に尽力した人物である。2023年は梅村学園創立100周年に当たり、学園100年の歴史をスポーツを通して顧みる上で、企画展としてこれほど適切な人物はいないと判断した。

*中京大学スポーツ科学部、**東海学園大学スポーツ健康科学部

第8回企画展の展示物は、主にミュージアムが所蔵する梅村すみ子資料を用いて作成する予定であった。だが、資料だけでは梅村すみ子の人となりや十全に反映する展示物の作成が難しいことから、生前に交流のあった関係者にインタビューを行い、一部の展示物を作成することとなった。インタビューで語られている通り、田口氏は中京大学在学中に梅村すみ子の指導を仰いでいた。田口氏は我々の依頼を快く引き受けて下さり、2023年6月15日に田口氏の自宅にて3時間ほどのインタビューを実施した。インタビューは、中京大学スポーツミュージアム学芸員の富田幸祐と東海学園大学スポーツ健康科学部准教授の木村華織の2名で行った。両名共にスポーツ史を専門とする研究者であり、木村は中京大学陸上競技部に所属していた。インタビュー終了後、その内容を精査して展示物「梅村すみ子の人となり」を作成した。展示物は2023年7月21日（金）より始まった「梅村すみ子展 超然と、まっすぐに百分の一秒への挑戦が繋いだ現在」にて公開となった。「梅村すみ子展」は11月12日（日）をもって終了している。

インタビュー内容を第8回企画展の展示物として活用するという目的は達成する事が出来たが、当日にお話いただいた内容は、一部のみの紹介にとどまるには惜しいものであった。

梅村すみ子は戦後、中京大学女子陸上競技部の部長／監督を務めただけでなく、1950年の愛知県国体で愛知県代表陸上女子選手団監督、1964年東京オリンピック日本代表女子陸上競技強化コーチ、1967年東京ユニバーシアード日本代表女子陸上競技強化コーチなどを務め、大学、県、日本代表と各種カテゴリーにおいて選手育成に臨んでいた。こうした指導者としての経歴や実績については数多く記録が残されているが、実際にどのような指導を行っていたのかについては詳らかとなっていない。インタビューにて語られている通り、田口氏はオリンピック出場という目標を掲げて中京大学に入学し、その目標を叶えるために行われた梅村すみ子とのやり取りは、まさに梅村すみ子の指導理

念や指導法を体現しているものであったといえる。その意味で、その指導を実際に経験した人物から語られていることの意義は大きい。また田口氏の在学時は体育学部（現スポーツ科学部）の豊田キャンパス移転の時期に当たり、部活動の拠点名古屋から豊田に移る過渡期でもあった。キャンパスの移転による部活動の環境変化というのは、学生スポーツ特有の事象であり、その実際が語られていることも貴重である。

これらは梅村すみ子と田口氏の関係を通して見える中京大学のスポーツ史に関する記録であり、文献史料からは到達することのできない重要な証言であると考えている。

以上のことを踏まえて、本稿では展示の際には使用しなかった部分を含めて、その全文を掲載することとした。

本稿について、田口氏に実名でのインタビュー記録の公表について許可をいただき、その上で内容の確認と加除修正をいただいた。田口氏には当日の内容を文字起こしして作成した原稿に対し、事実確認も含めて多くのコメントと加除修正ももっただけでなく、お忙しい中、直筆の修正表や資料の提供をいただいた。インタビュー及び原稿作成に多大な時間を割いてご協力いただいたことに感謝いたします。

インタビュー（2023年6月15日（木）13:30～16:30 田口氏自宅）

富田：よろしくお願ひします。まずは、中京大学に進学した経緯をお聞かせいただけますか。

田口：きっかけは高校の時ですね。高校は福岡の三瀧高校です。陸上部の先輩が中京大学に進学しておりまして、先輩方からいろいろ大学の話を聞いたり、高校の陸上部の顧問の立石先生も中京大学には素晴らしい指導者もいて先輩もいるから環境はよいだろうし、中京大学に行くとオリンピックに出られるんじゃないか、ということで薦めていただき中京大学に進学しました。

富田：高校生の時には、梅村すみ子先生のごことはご存知でしたか？

田口：名前は知っており、素晴らしい方だと聞いておりましたが、お話したことはなかったと思います。

富田：当時の中京大学は女子陸上部が全日本で優勝したりする時代でしたよね¹⁾。

田口：そうですね。私が入学したときも新入部員は結構な人数いましたよ。女子も男子も10人近くいました。あの頃は中京大学として陸上部に力を入れていたと思います。

富田：陸上部でのすみ子先生とのエピソードを教えてくださいませんか？

田口：大学1年生の時（1970年）ですが、思うように記録が伸びないことがあって、すみ子先生もその事について悩まれていました。それで、すみ子先生から三潞高校に行って、「立石先生に一度ご指導を仰いでください」と言われました。高校に戻り、恩師の立石先生に助走などの修正をしていただきました。

さらに中京大学でドイツ語を担当されていた田島直人先生²⁾にすみ子先生からお願いしていただき、田島先生からもご指導を仰ぐことになりました。田島先生は走幅跳のことよりも、「しこを踏みなさい」と跳躍の技術的な事ではなく、まっすぐ走る競技で、どうしても左右の動きのバランスが悪いから、しこを踏んで安定した走力を高めるためのトレーニングを教えてくださいました。

おそらく、すみ子先生もすごく悩まれて、どうしたらいいかと、いろいろ考えていらっしまったと思います。どの場面、どの時にアドバイスをすればいいかと、その時期を待っておられたと思います。ただ、この時は、どうしなさい、こうしなさい、ということは全くなかったです。言われたのは、「高校に帰って、一度、助走などを見てもらっていらっしまい」と言わ

れただけです。技術的なことは2年生になってからでした。大学1年生は練習環境や生活に慣れることに重点をおかれたように思うのと、ユニバーシアードやアジア大会などの国際試合があって落ち着いて練習できませんでした。

大学2年生は体調も良く順調にいろいろな大会や海外遠征に出場していたのですが、10月に日本インカレがあり、全陸上部員で頑張っていました。私は4×100mリレーに出場後に脚に軽い肉離れのような違和感がありましたので、すみ子先生に報告しましたところ、すみ子先生から「走幅跳出場はおやめなさい」と言われ棄権しました。来年オリンピックだから万全の態勢に戻して、それに向けて体調を整えることを優先されたのだと思います。すみ子先生にとっては、私のこの年齢的なチャンスを逃しては来年のオリンピックはないとギリギリの決断をされたと思います。私は「インカレに出場したい」と言いました。「軽い肉離れだから大丈夫です」と、そうしたら先生の体験を理論的に言われましたね。

木村：どんなことを言われたのでしょうか。オリンピックだからということもあったと思うのですが、何か覚えている範囲で教えてくださいませんか？

田口：私の方は「軽い肉離れだから大丈夫です」と申し上げましたが「無理をして大変な事になったら来年のオリンピックはありませんよ。インカレよりもオリンピックが大事というわけではないですが、ここで我慢することも大事ですよ」と言われました。それにインカレは学校間の対校戦ですから、軽い状態だったら少し休養すればすぐに回復すると安易に考えていました。すみ子先生は「本当に肉離れしたらオリンピックに向けての練習ができなくなり後悔しますから」と言われました。すみ子先生自身、ロサンゼルス・オリンピックの直前に肉離れをされ、100m準決勝落ちになってしまったことがあります。万全の体調であればメダルを取っていたと思います。悔いを千載に残された

自分自身の経験があったことから、指導者として私への貴重な「いまは無理しないように！やめる勇気も必要ですよ！」という一言であったと思います。

木村：そこはすみ子先生も譲らなかったのですね。

田口：譲られなかったですね。「やめる勇気も必要ですよ！」って言われて。指導者って、大変だと思います。選手は出場したいですから納得させることがすごく難しいと思います。それをどうやってやめさせるか、引き止めるかということが、やっぱり毅然とした態度で言わないといけませんからね。次の年のオリンピックが最大の自分の目標で夢だから、すみ子先生にとってもせっかくのチャンスが来年あるのに、それを逃す手はないでしょうと、責任を感じておられたと思います。先生の夢でもあったのですよ。オリンピックは誰でも出られるわけでもないし、目の前にチャンスがあるのに無にすることもなし、ここで優勝逃しても、オリンピックに出る方がね。

でもインカレだから私としては点数を稼がなきゃいけないでしょ。だって取れる点数をゼロにするわけだから、やっぱり申し訳ないって気持ちがありました。優勝が絡んでいるわけだから、ましてや私は4年生じゃないから。でも「来年、オリンピックでしょ」、「今やめないとオリンピック行けませんよ」って言われましたから、本当に気が重かったです。すみ子先生の決断に「分かりました」と…。

木村：やめたからこそ、オリンピックがあったのですね

田口：そうです。スムーズに冬季練習に入れました。本当にあの年はそれほど練習好きじゃなかったんですがやりました。私は時間をかけて練習するのが嫌いだから、一本一本、本気モードでやりました。オリンピックの前は本当に練習しました。競技人生の中で、どこかで自分が

やらなければという、全力集中する時期があるんですよね。それをどこに持っていかかということだと思います。やっぱり最高の大会が目の前にあるのに、それを狙わないことはないわけです。そのために競技やってるわけですから…。

木村：インカレを棄権させるのは指導者として、すごく難しい選択でもあったんだろうなと。中京大学は優勝を狙える位置にいたのに、出場をやめさせるという選択を選手にすること、それに対してチームとしてどうなのかということ、オリンピックがあるということにより、すごく複雑な心境での決断だったと想像します。選手としてはやめる勇気、指導者としてやめさせる勇気、どちらも大変ですよ。

田口：そうです。すべてすみ子先生の経験に基づいたものからきているので、「その人の夢を叶えるためにどうしたらいいか最善の方法を」と考えておられたと思います。やっぱりみんな後悔しますから…。私が何のために中京大学に進学したかということ、やっぱり大学四年間の内にミュンヘン・オリンピックがあったというのが大きかったんです。私は高校2年の時がメキシコシティ・オリンピックで、一応出場を狙っていました。その時は派遣標準記録が6m26cmでしたが、私は6m17cmしか跳べなかったんです。それでメキシコシティ・オリンピックに女子は誰も出られなかったんですが、もししたら次のミュンヘンに備えて誰か一人でも選ばれるかなと期待を立石先生としていたんです。結局女子は誰も選ばれませんでした。派遣標準記録を跳んでいませんからね。高校の時にはメキシコシティに行けなかったし、ここでミュンヘンも行けなかったら、その次っていうのはもう無理ですね。私達らの頃の女子選手は大学出たらやめるのが一般的というか、そういう人が多かったです。ですから、ミュンヘンを逃すと次はないし、すみ子先生は、何が何でもオリンピックに出場させたいという想いがあったのではないのでしょうか。私がミュンヘンに出ないと先生もきっと後悔されるだろうし、私もや

めとけばよかったって、後で言っても遅いわけですから、やっぱりこのチャンスしかないという、先生のギリギリの想いだったと思います。

（ケガする前の）大学2年生の秋に尼崎で開催された第6回全日本女子陸上競技大会で6m30cmの日本新記録を跳んだんです。当時の派遣標準記録が6m30cmなんです。追風参考記録でダメだったんです。それである日に、オープン参加で、跳ばしてもらい6m27cmを跳んだんです。それが自分の持つ記録の1cmの日本新記録更新なんです。でも6m30cm以上跳ばないとダメです。でも、期待としては追い風参考でも6m30cmを跳べたから「もうここでやらなきゃ、この冬はとにかく鍛えないと次がないから」ということで、すみ子先生から「青少年公園で一緒に走りましょう」ということになりました。すみ子先生はカルピスの温かい飲み物を水筒に作って下さり、それを持って先生が車を運転されて青少年公園³⁾に行き、走り込みの基礎練習からやり直していただきました。「あなたは走り方を直せばもっと跳べるようになります」と身ぶり、手ぶりでご指導いただき、青少年公園の起伏ある芝生の上を走りました。

富田：走るのみの練習ということは、すみ子先生としては田口さんのフォームを良くすれば、もっと記録が出るはずだという考えがあったのでしょうか。

田口：そうだと思います。「あなたはここが悪いんだから、もうここを直せば、跳べるから」っていう。要するに結合ですよ。跳躍と走法の結合ですよ。青少年公園に行かないときは、とにかく豊田キャンパスのグラウンドで、すみ子先生からご指導いただいた走り方を意識しながら200m走を7、8割ぐらいのスピードで20本から30本を走りました。最初は自分の走っている姿がわかりませんでした。現役時代のすみ子先生の走るフォームの写真を雑誌で見ると、すごくフォームが綺麗なんです。どこに力を入れて、どこで抜くか。そういう入力

完璧にできていらっしゃるから、それもやっぱり若い頃からの日々の鍛錬ですね。すみ子先生のラジオ放送原稿⁴⁾を読むと、それこそ何時間もかけて自分の弱点強化練習されたことが書かれていて、すごく努力されたんだなあと感じます。ただ走るだけでなく、身体のリラックスの仕方など、そういうことを、すみ子先生は日比野先生⁵⁾に教えていただいておりますから…。手を下げて力を抜く、力を入れるところ、抜くところなど話はよく伺いました。腰の高さ、キックの仕方、力を抜く入力加減、モモを上げる位置、など教えてもらった通りにやっているのですがこれでいいのかと、不安がありました。すみ子先生には理想のイメージがあり、それに近づけるように自分なりにイメージして練習しました。

意識して走っている内にスムーズに走れる感覚がわかるようになり100m走の記録を縮めることができました。

よく自主練習で二部練習や男子の短距離と一緒に練習させてもらったり、筋トレ、中長距離の人と一緒にクロスカントリーも走りました。とにかくやれるもの全部やりました。走り方だけは、本当に悩みました。

木村：半年間の冬季練習をやってシーズンを迎えたときには、自分の中で走り感覚が変わっているとか、スピード感が違うとか、変化を感じることはあったんですか。

田口：1972年シーズン前に陸連の合宿で走高跳の選手が2人いまして、その選手たちは調子がよくて練習中により記録を出すのです。それで私はすみ子先生にお電話をしたことがありました。「先生、ハイジャンプの選手はすごくいい記録を出すんですよ！私、あんまり調子よくないんです」とお伝えしたら「大丈夫ですよ。まだシーズン始まってないですし、これからですよ！」と言われました。合宿に行きますと、すみ子先生にお電話をしていろいろ報告し、助言をいただけていました。

シーズン始まってすぐ4月、5月で6m30cm

以上を跳び、ミュンヘンオリンピックの派遣記録を突破し出場することができました。走り方のご指導をいただいたことで走幅跳の助走スピードが増しミュンヘン・オリンピック出場、日本記録更新(6m41cm)の結果を残すことができました。やっぱりすみ子先生のおかげです。走り方のご指導をいただいたことが、走幅跳の助走に結びついたということです。

木村：先生の中では見えていたんですよね。走りが変わってきてるから大丈夫ですよっていう。

田口：そうじゃないかと思います。ただ鏡がないから私自身はどう変わってきているかちょっとわからなかったです。でも、練習でスターティングブロックをつけないで走り抜ける100m走の記録がちょっと伸びたんです。100m走れるから走幅跳が跳べるわけではないですが、100m走の記録が伸びたから、やっぱりフォームが良くなったんだろうと思います。

木村：どれくらいの頻度ですみ子先生はグラウンドでご指導されていたのでしょうか。グラウンドは豊田キャンパスではなく八事キャンパスですよ？

田口：私、二年生から豊田なんですよ⁶⁾。一つ下の学年から豊田に移転だったんです。その際に、私も行きなさいって。だから最初、豊田にある清明先生とすみ子先生のご自宅の上にある寮に、2つ上のキャプテン(藤居満代さん)と私と砲丸投げで一年生だった林香代子⁷⁾さんの3人が入ったんですよ。

私たちのころは豊田のグラウンドで石拾いをよくしましたよ。400mトラックで、みんなで練習がてら石拾いでした。私は八事で講義でしたから講義がある時は八事で練習して、時間があるとき、午前中で講義が終わったりするとバスで豊田に行って練習していました。学年で私だけが豊田生活でしたから。バスで八事に行って向こうで練習をやって、またバスで帰って寮

まで歩いて登って。食事当番があるときには練習を早く切り上げて行くとか、ものすごい二重生活でした。

木村：田口さんたち3人がお住まいになった豊田の寮は、清明先生とすみ子先生のご自宅のそばにある常盤荘ですよ。

田口：そうですね。理事長宅のそばでした。自宅の上に私たちのいた寮があって、その近くにも陸上部の女子寮があり、ほかの人たちは後でそこに入りました。すみ子先生もいろいろなところに執筆したり、お話しされたりしていましたが、「女子選手はやがて妻となり母となって家庭の中心となり、立派に生きていかなければなりません。その時、陸上競技を通じて得た貴重な体験は、必ず生きてきます」ということで、食事の作り方を教えていただいたり、色々なマナーを教わりました。

そう、ミュンヘン大会の年に夏に札幌で合宿があったんです。オリンピックに行く前に。記録会みたいな大会があったんです。札幌まで清明先生とすみ子先生が来てくださったんです。それで競技場にも来てくださって、その時も標準記録を跳んだんですけど、すごく喜んでくださって、それでオリンピックに決まった時も、「決まりましたよ」と本当に喜んでくださったんです。清明先生も一緒に。だから、ああ、やっぱり2年生の時の日本インカレは出場しなくて良かったなとつくづく思いました。本当に札幌まで2人で来てくださって、嬉しかったです。肩の荷が少し下りた気がしました。清明先生とすみ子先生の自宅のそばに住んでいて、お声かけてもらったりして大きな力になりました。

木村：オリンピックが決まった時は、なにか特別な言葉を頂いたりしたのですか？

田口：「本当に良かったですね」とお言葉いただきましたね。それと決まる前の話になりますが、オリンピックの年に4月から大会があっ

て、標準記録を跳んだ後の大会中に1cmずつ、次の大会でまた1cmと、ちょっと記録が伸びている時があって。そしたら清明先生が「じゃあ、ちょっとカツの肉を一枚ずつ高くしなきゃいけないね」とか言われてね。清明先生はポロっとジョーク言われるんですよ。でもすみ子先生は本当に凛とされておられて、2人ともお話されるのが好きなんです。すみ子先生はちょっと早口タイプで、清明先生はゆっくりしゃべられるんですよ。すみ子先生のお話が止まらなると清明先生が「私にも話させてください」と言われるんです。本当にご夫妻は息もぴったりで。すみ子先生も清明先生に献身的に過ごされていました。お二人に会いに行くと楽しかったです。本当に色々、お話の幅が広いんです。戦前戦後を通して違った場所で2人はものすごく苦勞されていましたから。苦勞を乗り越えていらっしゃるの、すごく寄り添った感じがするんですよ。理想のご夫妻ですよ。

富田：すみ子先生を一言で表すと、どういうお方だったのでしょうか？

田口：理想の女性です。良妻賢母ですね。何に対しても凛とされて手を抜かれなくて、本当にすべてに全力投球じゃないですけども。繊細な方で。ものすごく気遣いの方です。私だけじゃなくて、すみ子先生と接した先輩方もみんなそう思われていると思いますよ。私たちの上の先輩方は、すみ子先生、すみ子先生と言って本当に慕っていらっしゃるんです。ですから、梅の会を先輩たちが作られて、すみ子先生をご招待しているいろんなところで一緒に食事したりしていました。先輩たちの頃は先生がグラウンドに出る機会とか、接する機会がもっと多かったと思います。それだけ、すみ子先生のことをご存知だし、公私に接しておられるから、先生の良さっていうのは皆さんわかっているって梅の会は長いこと続きました。それこそ東京ユニバーシアード⁸⁾ぐらいの先輩方は、ユニバーシアードに出場した方が何人もいらっしゃるって成績も良かったのです。それだけ、すみ子先生が関わっ

てご指導されていたのですから。だからすごく皆さん仲良くて、すみ子先生をものすごく慕っていらっしゃいました。

私たちからするとちょっと雲の上の存在みたいなところもありますから、やっぱり年齢が離れて、元監督なんですけれども、やっぱり清明先生のお世話や家庭のこともありますし。すみ子先生は清明先生があ戦争に行かれてシベリア抑留されたりという時にも、学校運営のことも子供さんのこともすべて、一人でやられてきただけに、精神的なものが違います。やっぱり、私達からすれば本当に雲の上の方です。ですから、そんなに簡単にスッと行けるような状態でなく2歩3歩下がって、お話聞くときも畏まりました。私は先生を人生の母として、師として仰ぎ見てまいりました。先生から賜った暖かく心のこもったご指導は数え切れません。

本当に細かくいろんなことを公私ともに教えていただき、敬愛する先生でした。

参考文献

- 1) 中京大学体育会女子陸上競技部は1964年、1965年に全日本学生陸上競技対抗選手権大会女子部で2連覇を果たしている。
- 2) 田島直人(1912-1990)：1936年ベルリンオリンピックの三段跳で金メダルを獲得した陸上競技選手である。戦後には中京大学でドイツ語の講師をしていた時期がある。
- 3) 現在の「愛・地球博記念公園」である。
- 4) 1984年11月26日から28日にかけてNHKラジオ番組「人生読本」にて梅村すみ子による「人生とスポーツ」と題した放送が3回に渡って行われた。(第1回放送「13歳の日本代表選手」、第2回放送「記録への挑戦」、第3回放送「短距離選手と長距離人生」)
- 5) 日比野寛(1866-1950)：教育者であり、愛知一中の校長を務めていた時には体育を奨励し、その後もマラソンの普及や指導に尽力し、マラソン王とも言われた。
- 6) 中京大学豊田キャンパスは1967年に建設

が始まり、完成とともに1971年に体育学部が移転。体育会も活動拠点を八事から移している。

- 7) 林香代子：砲丸投、円盤投を専門とし、中京大学2年生で出場した1972年の第56回日本陸上競技選手権大会より砲丸投で10連覇を果たす。
- 8) 1967年に開催された東京ユニバーシアド競技大会のこと。この大会では梅村すみ子は陸上競技の強化コーチを務めている。中京大学関係者は10名が出場し、竹田真美が走高跳で、中山彰規が体操個人総合で優勝した。